

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 10月 第176号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

創立30年を振り返り新たな一歩へ —初期3代理事長への想いに寄せて—

昭和57年8月末の頃でした。加古川市長に3期目の当選をされた直後の中田敬次市長に対して「老人ホームを創りたいと思うのだが、個人で可能だろうか？」と父親を通じてお伺いしたのが、せいりょう園の始まりでした。

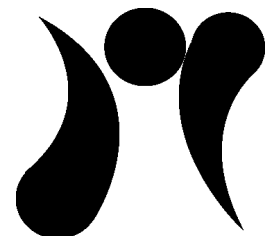
昭和51年に祖父が82才で亡くなり、その後5年を経て祖母が84才で亡くなりましたが、その間の祖母の変貌は正に『恍惚の人』でした。常に「しっかり者の姑」であった祖母が、徐々に徐々に有吉佐和子さんが小説に描く恍惚の症状を体現して行きました。親戚や村中の人を巻き込みながら、畑に行き更に遠くへと出かける毎日から、徐々に動けなくなり、最期の頃は尿や便で汚れた寝間着や布団、畳やカーテンの掃除・洗濯に悪戦苦闘する母親を傍らで見るだけでしたが、亡くなった後で何となく心に残った印象が『介護は社会的に必要な仕事』でした。

中田市長からは、「社会福祉法人を設立して国庫補助金を貰って創る国の認可事業」であり、実務を担当するのは県の福祉部局との事、県下各市内の設置計画を県が聞き取る「ヒアリング」が毎年8月に実施され、今年は終わった処で、来年の8月までに設置計画書を準備するように、と伝えられました。

早速、県の担当部局に出かけて話を伺いましたが、その際には当時の県議会議員で父の友人でもある故高松清太夫先生が各部署を案内して御紹介下さり、想いのほか和やかな雰囲気の中で話を伺ったように記憶しています。

そして、行政実務には全く知識・経験の無い私が1年間で設置計画書を創り上げるのは到底無理であると解り、父の友人で市議会議員であり行政書士でもある野口の故橘隆夫先生に助力をお願いしました。そしてもう1人、同じ長砂に生れ小中高を通じて3年先輩で、当時市の中堅職員として市長の信頼が非常に厚かった吉田正己さんに応援をお願いしました。設置計画には建築計画が不可欠であり、父の長年の友人で1級建築設計士の小屋幹夫氏に設計をお願いして、一緒に各地の特養を見て回りました。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

一方で、社会福祉に関する知識も経験も全く無い私に対して心配した吉田さんが、加古川市が福祉コミュニティ条例制定の際に助言をされた大阪府立大学教授で加古川出身の船曳宏保先生をご紹介下さり、お会いして色々とお話を頂きました。大阪府社会福祉指導センターで毎日夜6時から9時の間、社会福祉主事資格認定講習会が行われているので、福祉の基本的な原理や理論を学んではどうか、とお話され58年度の1年間、週に2日か3日大阪の谷町まで通いました。船曳先生を初め、故岡村重雄先生や故小室豊充先生など当時一流の社会福祉研究者の講義を3か月交代で聴講し、『個人の社会関係の維持＝社会福祉原論』は今も私にとって判断の基礎となっているように思います。

57年の秋も深まった頃、奈良の壺阪寺へ上る坂道には大木が倒れ崖が崩れ、台風の爪痕が大きく残っていました。麓の高取町で前年開設した『特別養護老人ホーム光明園』を見学したのが、私が老人ホームに足を踏み入れた初めての経験でした。壺阪寺の故常磐勝憲ご住職が笑顔で直接お迎え下さった感激は、今も心に残っています。吉田正己さんの奥様・由紀子夫人が奈良女子大学在学中に点訳ボランティアとして訪れていた壺阪寺でご住職の知遇を得て、結婚後も常に交流が続いていた縁でご紹介下さったのでした。吉田さんと小屋さんと私の3人で光明園から壺阪寺にお参りをし、境内にある『盲養護老人ホーム慈母園』を見学して帰って来ました。その後、関西を中心に東京都内の数ヶ所を含めて30前後の特養を見学して構想の参考にしました。『玄関を入ったときの雰囲気と印象』の重要性を実感した経験でした。

社会福祉法人は、『理事長』が大きな役割と責任を負います。公益法人として社会的に存在する意義と価値を象徴する『顔』であり、事業の『心』を映し出す代表です。設置計画を整える中で『理事長予定者』を決めねばならず、そこで心に刻んだ名前が『中野文門先生』でした。父の弟・故中野憲三が養子として長年仕えた義母・中野瑠璃枝さんの兄であり、兵庫県議会議員を経て参議院議員を2期務めた後、当時は神戸学院大学理事長を務めておられました。父の末弟・故渋谷悟良がその昔秘書を務め、私が高校3年の夏休みに東京の予備校の夏季講習を受講した際1ヶ月間、参議院麴町宿舎に居候して以来、大学時代には議員会館に時々伺い昼食を御馳走になる『親戚で一番偉い人』でした。

「神戸・兵庫駅前の大黒さん」で知られる『福海寺』のご住職でもある先生を父と共に訪れ、特養の設置計画を説明して理事長就任をお願いした処、快く引き受けて下さり、緊張をほぐす安堵感が胸いっぱいになりました。『老人ホームは非常に重要な仕事だから、福祉に関しては自分の右に出る者はいない、と言える位になるよう努力しなさい』と言葉を掛けて頂きました。

昭和58年8月のヒアリングを経て年度末には兵庫県の特養設置計画に採択され、国に進達されました。進達に際しては当時衆議院議員であった故・渡海元三郎先生に全国的な情勢をお聞きし、的確な助言も頂きました。そして59年度7割～60年度3割の2カ年継続の国庫補助事業として認可され、60年10月1日の開設を迎えたのでした。

昭和60年1月、初代中野文門理事長就任。昭和62年1月、2代目中田敬次理事長就任。平成8年6月、3代目高松清太夫理事長就任。そして平成15年1月より現4代目小山一也理事長に引継いでいます。発起人会から法人設立・施設創立に至る経過を見届けて頂いた3人の歴代理事長を偲び、当時を振り返りながら、新たな歴史を刻む一歩を踏み出す為の礎にしたいと念じます。

初代・中野文門理事長には、法人設立認可申請と施設建設補助金申請とが同時に進行する中で、理事長予定者として膨大な申請書類に実印を押して貰わねばならず、何度も何度も早朝に押しかけて、ご家族も含めて大変ご迷惑をお掛けしました。昭和55年～60年当時は日本の福祉政策の黎明期であり、当時の根本的な議論が今の地域中心の福祉施策につながって来たように思います。せいりょう園にとっても『黎明期』であり、事業の全てを模索しながらの新たな出発を、中野理事長は『どっしり』と受止め、『しっかり』支えて下さいました。感謝に堪えません。

2代目・中田敬次理事長は、民間出身の先見性に秀でたアイデア市長として約3期務められ、退任後に理事長を引受けて下さいました。ノーマライゼーションの理念を実現するべく昭和64年にゴールドプランが策定されて福祉基盤の拡充が図られ、せいりょう園においても増築・新築・新規事業開始、と矢継早に事業を上げた時期でした。平成3年に地域交流ホール増築、4年にホームヘルパー派遣事業開始、5年に痴呆型デイサービスと在宅介護支援センター開始、7年に一般型デイサービスとショートステイ（20床）事業開始、8年にケアハウス（30室）開設、と続けました。中田理事長の『先見の明』に強く支えられた、と感謝しています。

3代目・高松清太夫理事長は、『味噌と糍』製造販売の老舗を経営され、加古川市議会議員から兵庫県議会議員を経て県の常勤監査を退任後に、理事長を引受けて下さいました。事業や議員の傍ら、加古川東高校の柔道の非常勤講師として学生を指導され、私も指導を受けた一人です。市議・県議としては市民の要望や陳情を行政当局につなぐ役割を非常に大事にされ、私が初めて県庁に行った時にも、各部署を自らご案内下さり、県の職員方が丁寧に対応して説明して頂いた事を記憶しています。介護保険に移行する前後の慌ただしい時期に就任して頂き、グループホーム5ユニットを順次開始する時期にも重なりました。体調の優れぬ時にも週に1度は来園下さり、笑顔で励まして下さいました。

御3方共に故人となられましたが、天空の何処かで『せいりょう園』の行方を見守って下さっているように感じています。せいりょう園に寄せて頂いた御3方の想いに応える途を踏みしめ、改めて前進したいとの想いを込めて、創立30年の節目の時に記します。

せいりょう園 渋谷 哲

せいりょう園創立30周年記念特別企画

國森康弘氏「みとりびとー写真と講演」

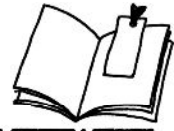
2015年11月27日（金）午後1時～3時

加古川市総合福祉会館 2階大ホール

國森康弘氏の講演は、様々な看取りの場面を写真で表現し、淡々と解説や想いを伝えます。スクリーンに文字は全く出てきません。参加者が写真を見て、考え、感じる講演会です。講演会后に私自身も感じた『余韻』を、是非多くの方々にも感じ取って頂きたいと思います。

（京都の講演会に参加した際の感想；ケアハウス施設長 入江良行）

問合せ：せいりょう園 TEL (079) 421-7156/FAX (079) 421-6422 参加費無料



真宗 大谷派 明円寺
本多 真 住職

デイサービス 谷澤 高明

猛暑から一転、朝夕、めっきり寒くなってきた。しかし南の海では台風が猛威を振るっている。「おい、おい、もうキミの季節じゃないよ」と言ってやりたい。秋が訪れようというのに、世間では悲しい、むごい事件が毎日のおきている。この夏日本中を震撼させた中学生男女誘拐殺害事件。いまだに真相は明らかにならず、容疑者の黙秘も続いているらしい。この事件に関連して報道機関はこぞって大人たちの無関心さを指摘する。誌面では『捜査に役立つカメラも、名前に付けられたほど「防犯」には期待できない』『子供たちを守り育てるのは、大人の優しく厳しいまなざしだろう。行く当てもなく街をさまよう子供を見つめているのが、カメラだけというのでは悲しすぎる』。私があの中学生を目にして声を掛けるだろうか。声を掛けられるだろうか。申し訳ないが私にはそんな勇氣もないし、優しさも、思いやりも湧いてこない。

私は朝夕デイサービス利用者さんの送迎をしている。夕刻の送り時、小学生の下校時間と重なる。ボランティアさんに見守られて、横断歩道を友達同士でしゃべりながら、ふざけあいながら、時には後戻りしながらゆっくりと渡って行く。傍に立っている大人はにこにこしているだけで注意もしない。一緒になってふざけ合っている時もある。ずっと以前は小走りに「ありがとう」といって横断していたと記憶するが、いつからか変わってしまった。これは子供の方ではなくて大人の責任ではないだろうか。過保護すぎて、子供たちに危機感とお礼心を持たせなくなってしまったのではないか。見知らぬ大人から声を掛けられて、警戒感が沸かないのが私には信じられない。子供の頃、母親たちから毎日のように言われていた。「知らないおじさんに声を掛けられてもついて行ったらアカン。子取りにさらわれてサーカスに売られてしまうよ」。小学生低学年の頃、1人で下校時、青年から時間を聞かれて、「知らん！」といて思い切り走って一番近くの家飛び込んだ経験がある。今は道にも、池にも危険なところを隠す保護柵を設置する。子供を危険から守ろうとするあまり、危険を察知する能力の成長を阻害しているように思えてならない。ある紙面に読者投稿の歌がある。『夜遊びは 攫(さら)われ売られサーカスで 酔を飲まされる早く帰りな』(子供の頃、サーカスで軽やかに演技するのは、酔を一杯飲まされて 体を柔らかくするんだ、とまことしやかに話されていた。私たちは信じていた)。

【せいりょう園空き情報 平成27年10月21日現在】

- ① ケアハウス：4室 (バス・トイレ・キッチン付24㎡)
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかがわ」：4室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

[問合せ先] せいりょう園 Tel.(079)421-7156/(079)424-3433

今月の仏教講話には真宗 大谷派 明円寺 本多真ご住職に来て頂いた。ご紹介いただいた光念寺 本多正尚ご住職から「お若い方」と伺ってはいたが、まさに青年住職。30代前半のまぶしい限りの姿である。冒頭自己紹介されたが、ご住職と保育園の園長もされているとか。最初に合掌し、一同で『南無阿弥陀仏』を3回唱えた。そして「こういう場所でお話しするのは初めてなので、ここに来るまでもっとオトナシイ感じなのかなと思っていましたが、皆さんの眼がキラキラされているので、正直、いい意味でびっくりしました。何を話していいか…。少し私の歩んできた道を話します」。いきなり驚かされたのが、高校大学と海外留学されたということ。中学卒業後イギリスの高校へ。大学もイギリスの大学へ進まれた。帰国されて、当時住職をされていた母上から、早くお寺を継ぐ資格を取るよう望まれる。お寺に生まれた以上、いつかはそのようになるとは思っていたが、気が進まなかった。というのは仏教があまり好きでなかったとか。仏教とは、『死ぬことを、死に関することを教える』ことだと思っていた。抹香(まっこう)臭いことを話して、お布施をもらって生きていくのは胡散(うさん)臭い。ところが京都の『大谷修学院』で仏教を学んで、真逆の『仏教とは生きることを説く』教えだということを理解する。人はよく死ぬと「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人(じん)、天、極楽」のどれかに行くというのが、そうではなくて、それらは生きている人の命(心)の内において、心の持ち方でこれらを行き来しているのである。地獄とは迷った人が行く怖い、孤独な世界である。孤独にも二種類あって、一人でいる(居ると決めた)孤独と、皆といるのに、皆と繋がれない孤独。後の孤独の方が本当に辛いものである。どう生きるか、生きるためにどうしたらいいか。そこで初めて仏と一緒に生きることに救いがあることに気付く。阿弥陀様のところに帰っていける。生きている最も深いところにある魂(本願)に帰っていける。どうやって生きていこうか、そこに仏教の教えがある。仏はどこにあるか。仏様はいずこにおられるか。突き詰めていくと自分自身の中に見ることができる。ということは回りの人の中にも見ることができる。何事もすべて自分自身の心の中にあるのである。心の置き方次第なのである。生き方次第なのである。

参加者の顔色を見ながら、話の内容が少し難しい方向に進みそうになると、話は一変ハワイのお寺に勤められた時のことなど話されて、参加者は興味津々。みんなの眼をキラキラ、キラキラさせて講話は終わりました。ありがとうございました。ぜひまた機会を作って下さい。

次回は11月2日の予定です。



～せいりょう園 開設記念コンサート～第25回ロンドンアンサンブル

日時：平成27年12月6日(日) 18:00開場 18:30開演

場所：リバティかこがわ2階 かこバス「長砂公民館前」下車すぐ(駐車場有り)

料金：4,500円(休憩時間にドリンクサービスがあります。)



テーマ「グループホームの暮らし」

今回のテーマは、『グループホームの暮らし』ということで、グループホームに入居されている5名の方にも参加していただきました。

グループホームは2000年に介護保険制度が発足した時に設立された施設です。認知症と診断された方が対象で、少人数で暮らしています（上限9名）。仲間と落ち着いた雰囲気の中で生活することが出来ます。認知症の親を家で介護していると、煮詰まった親子関係になる事がありますが、グループホームに入所して良好な関係になった例や、入所させたことで初めは罪悪感を持っていたが、生き生きとしている姿を見て、良かったと思えたという声がありました。

現在グループホームの数は、加古川近辺で21事業所あります。

せいりょう園に入所されている方に、日々の暮らしはどうか？という質問をすると、みなさん顔を見合わせ「楽しい」とおっしゃられ、仲の良さが垣間見られました。

地域の方からは、入所するにあたり、要介護の基準についての質問がありました。要介護の基準は、どのサービスも同じですが認知症は要介護の判定に反映されにくく、特に、初期の混乱期は身体的には自立しており、着目されにくいです。この時期は、家族がとても辛い思いをします。ご本人はさらに辛い思いをしていますが、その時期を過ぎると平穏な時期が訪れます。それは、人間として、生きる者としては強者です。我々は日常、気遣いなどをしながら生活していますが、認知症の方は、自分をさらけ出し、自由に生きています。しかし、社会的には周囲のサポートが必要な弱者とされています。地域の中で豊かに暮らすには、サポートが必要ですが、現在認知症の方は420万人、その予備群は400万人と言われ、特養の入所待機者も多数います。

次に入居者の方に「自分の老後や最期をどう考えているか。死ぬことを考えたことがあるか。」という質問を投げかけると、「考えた事ない、長生きしたい。」「今は元気なので、元気な間はグループホームにいたい」「考えた事ない、先の事はわからない」「しょっちゅう考えている、誰にも迷惑かけずに生きたい」「認知症だけにはなりたくない」という答えが返ってきました。

地域の方が、入居者の方の明るく笑いのある会話を聞いて、「グループホームには自立の方が多いいのか、車いすや寝たきりの方はいるのか、また自立でないと入れないのか」「家族がいても入れるのか」「年齢は」と、次々質問が出ました。グループホームでは、家族がいても認知症の診断があれば入居でき、入居当初は身体的に元気でも、徐々にレベル低下し、車いすや寝たきりになる方もいらっしゃいます。一人で食事ができなくても、口に食べ物が入れれば、自分で呑み込める場合なら自立とも言えるので、一言で「自立」と言っても、幅広い解釈があることを説明しました。自立支援とは、手厚くする事ではなく、できない所を介護職がすることであり、せいりょう園のグループホームでは望めば最期まで生活できます。

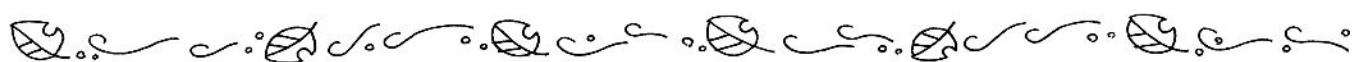
年齢をある入居者の方に何うと「昭和6年生まれの95歳」と答えられ、周囲の入居者や職員から一斉に「違う」と言われ、笑いに包まれました。みんなに84歳だと言われると、「そう？10年前から90歳だと思っていたわ」と呑気で明るい笑顔がみんなを和ませていました。そのやり取りを見て、地域の方が、「実際の年齢よりもお元気で明るい」と言われました。認知症の方々は、環境が影響するので、グループホームだと家族介護で煮詰まるより生き生きした生活が送れるかもしれません。

叔母が認知症で別の施設に入所しているという方は、「『薬や注射もない、何も食べていない、早く帰りたい』という訴えに、介護士さんは否定しないで聞いてくれました。その否定しないという事が大切なんですよね」と言われました。また、別の方は「主人の父が認知症で10年介護をしました。食べていない訴えに、1日何回もの食事を少量ずつ出すなど工夫して、10年間で私が老けてしまい、今の方が若いと言われるぐらい、大変でした。介護保険が始まり、最後の1年3ヶ月だけ入所しましたが、それまでは誰も手伝ってくれません。1回でも預かってほしいと思っていたが、介護保険もなく、介護は長男の嫁の仕事でした。今はいい時代です」と話されました。参加されている地域の方は団塊の世代の方が多く、2025年の75歳になる頃には行く所がないのでは、との声も出ていました。

次に、グループホームの暮らしの中で、集団でする事と、個人でする事が決まっているのかという質問がありました。せりょう園では、できる方ができる事をしているので、特に決まり

り事はありません。料理は職員が作っているが、手伝ってもらえる方がいる時はお願いしています。男性職員が料理担当の時には、よく手伝ってくれているとのことで、入居者の方もよく職員の様子を見ておられるようです。

その後、希望者には、グループホーム内の見学を行い、語ろう会は終わりました。



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

季節は移ろい、街中には紅や黄など秋らしい色が目立ってきました。早いもので、暦は11月になろうとしています。陰暦の11月は「霜月」と呼ばれる月で、霜月には前月（神無月）に出雲へ出かけていた神々が、風に乗ってそれぞれの神社に帰ってくる「神迎えの朝日（ついたち）」があります。昔この日には、お赤飯を炊きお神酒と一緒に添えて神様をお迎えしていたといわれます。現代においても祝い事の際に作られることの多いお赤飯ですが、実はとても良い食べ合わせ料理ということをご存知でしょうか。お赤飯は餅米と小豆を炊いた料理ですが、米に少ない必須アミノ酸「リジン」を豆が補い、豆に少ない必須アミノ酸「メチオニン」を米が補うという理想的な組み合わせ料理なのです。また小豆に含まれるビタミンB群や食物繊維、ポリフェノールが疲れを癒して体内をスッキリさせてくれます。

あまり普段の食卓では食べる機会のないお赤飯ですが、これを機に食卓で召し上がる機会を増やしてみたいはいかがでしょうか。

平成27年10月1日 開園記念日



毎年、開園記念日に、近隣の日本料理店の寿司職人に、施設内で入居者の目の前で握ってもらい、供します。

海老・穴子・鮪・鯛・はまち・雲丹・いくら・玉子・鰻と9種類の豪華なにぎり寿司を見て楽しんだ後、美味しく味わいました。

普段の主食は、お粥ですが、お寿司を小さく握って提供すると、笑顔で沢山食べられる方もおられました。



平成27年9月24日、25日、29日、10月1日

野口南小学校6年生との交流会（2回目）



今年の6月に引き続き、2回目の交流会を行いました。先生より生徒からの希望もあったとの報告を受け、実現しました。

前回の高齢者との交流で学んだ6年生は、チームで色々と催し物を考えて披露しました。生徒たちは、思うように物事が運ばない状態を沢山経験しましたが、相手のことを考えて行動に移していました。大変有意義な時間を過ごしたのではないかと思います。

【せいりょう園待機者状況 平成27年10月 9日現在】

○入所判定済み者 319人（グループの内）

Iグループ…89名 IIグループ…108名 IIIグループ…97名

【平成27年3月末迄の判定】

65点以上…21名 80点以上… 1名 90点以上… 3名

【平成27年4月1日以降の判定】

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

平成27年4月より、県の「入所判定マニュアル」の制度が変わりました。

100点満点中、点数の高い方が入所対象となります。但し、直接本人・家族に話を聞いて、入所の緊急性を判断します。要介護1または2で、点数が65点以下の方は「非該当」となります。但し、介護の必要性・在宅介護の困難性が高い場合には、特例入所の必要性が高いと判断します。